

その五

繰り返しますが、私たちは明らかに斜陽を迎えた産業となつてしまつています。そして、先行きが不透明な業界の住人には、ふたつの選択肢しかありません。「ここから抜けるのか、とどまるのか」私は「とどまる」ことに決めました（もつともこの年になれば、そうせざるをえないのですが）。しかし、とどまることを選んでしまうと、その次には更なる難問が待ち構えています。今までと同じやり方は時代からスポイルされているのです。仕事のやり方を変えなければならぬ。しかもそれは、他人から変えられるのではなく、自ら能動的に変えようとしなければいけないのです。しかし、実はこのことが、私たちにとって最も困難なことの一つなのです。自分から変わらうとするには、私たちは上から与えられる「正解」（実際には正解であつてもなく

ても、正解だとして与えられるものゝを待つことに、あまりにも慣れ（慣らされ）すぎてしまっけています。体質として染み付いてしまったその習慣を捨てることなしには、自ら変わるなどということが出来るはずがないのです。

二つの選択肢の中から、とどまることを選んだ人間は、今度は抛って立つ足場を決めなければなりません。

それをどこに置くのか。どこを向いて仕事をしなければいけないのか。

そのことを私たち一人ひとりが考えながら仕事をすることが必要なのです。

私たちの仕事の生い立ちからして、「政策」に頼ることを放棄することは恐らくできません。しかし、地域を向いた仕事をしていくことを第一に考えなくては、これからの私たちの存在意義は見出せないのではないでしようか。